

ふるさと探訪

新々の記

冬の郷愁



"冬の詩"

里・郷・古里・故里・故郷とは、生まれ育った土地であり、先祖代々住んでいる場所であり、そして心のふるさとである。また、郷愁(ノスタルジア)とは、遠く離れて故郷をなつかしく思う気持ちであり、望郷心であり、そして時にはホームシックなのである。

冬の夜：燈火近く、衣縫う母は、春の遊びの、楽しさ語る、居並ぶ子どもは、指を折りつつ、日数かぞえて、喜び勇む

囲炉裏火は、とろとろ、外は吹雪(一九二二年、明治45)文部省唱歌の一番は、雪深い田舎の冬の夜、着物を縫う母と子供たちのゆったりとした一家団樂が歌い込まれていると思うが、どうであろうか。

囲炉裏(床の一部を四角く切って設けた炉で、自在鉤で炉の上につるした煮炊きの鍋や釜などをかけた)り、暖房にも使われた)の周りで車座となった楽しい里の原風景が映し出されて来るのも、今はもうストーブオンリーで、囲炉裏は明治の家(羽衣公園)か、大正の家(キトウシ森林公園)そして郷土館老人保健センター前)に保管されている位だろうか。もちろん旧家では現存して

いるかも。

そういえば、薪・石炭・石油・電気とストーブも時代と共に変遷した。が、釧路では、石炭のぬくもりを家庭に」と、約千五百戸で石炭ストーブの根強い人気があると報道されて、かつての赤々と燃える暮らしが再来するかもしれないようである。

ペチカ：雪のふる夜は、たのしいペチカ、ペチカ燃えるよ、おもては寒い、栗や栗やと、呼びます。ペチカ(一九二五年、大正14)北原白秋)は、北欧・ロシアなどの寒地で発達した暖炉で、レンガなどで壁に作り付け、薪などを燃料とする低温放射暖房である。あの香ばしくて芳ばしい焼き栗を頬張る郷の冬が浮かび出されて来る。

そういえば、ペチカも然ることながら、冬ソナのヨソ様に代表される韓流の生活は正にオンドル(韓国)の床暖房システム)の熱風そのものの採暖である。終戦直前に学徒勤労動員で出役した木工場の事務所はオンドルであった。コソクリートをじわつと伝わった独特の温もりが足裏をくすぐり、ベニヤ板にマントを敷いて昼寝をした時のホカホカさは忘れられない。

雪：雪やこんこ、霰やこんこ、降っても降っても、まだ降りやまぬ

犬は喜び庭駆けまわり、猫は火燵で、丸くなる(一九二一年、明治44)の一番は、降り積る雪の日の文部省現文部科学省)唱歌である。

火燵は、炭火や電気などの熱源を樽(たもと)に、布団をかける木製の枠(たもと)で囲った暖房具であり、掘り火燵と置き火燵がある。

行火は持ち運びする暖房具で、陶土器や木のうつわの中に炭火を入れて、手足を暖めるもので、これを火燵に入れたのである。火傷や火事に注意して、四方から足を入れて昼寝をしたり、お八つを食べたりしたが、兄弟姉妹の口喧嘩から取っ組み合いとなり、火燵を引っ繰り返す大さわぎをして、熱くて痛い(ヤイト灸)の罰が飛んできた往時が思い出される。

そういえば、火燵も行火も物置で休眠中の家が多いこのころ、ペットのポチタマも様変わりした現在の、冬の郷愁も多様だと思っが、さて。

(元)郷土史編集専門員
尾池隆男

人口 / 7,627人(前月比 4人) 男 / 3,650人(前月比 9人) 女 / 3,977人(前月比5人)
世帯数 / 2,938戸(前月比 3戸) 出生 / 7人、死亡 / 8人、転入 / 17人、転出 / 21人 【11月30日現在】
住民登録の手続き上、人口増減と出生・死亡・転入・転出の増減は一致しないことがあります。



本誌の印刷には、大豆インクを使用しています。また用紙には再生紙(100%)を使用しています。